ブックス・ろぼど

成功者の信条と新人類の本音

新・旧ビジネスマンの世代感覚を読む

キングスレイ・ウォード　城山三郎／訳
『ビジネスマンの父より息子への30通の手紙』（新潮社・1500円）
津田　眞激／編著　『新世代サラリーマンの生活と意見』（東洋経済新報社・1400円）
――「団塊の世代」から「新人類」まで

●評者　相良　竜介（経済評論家）

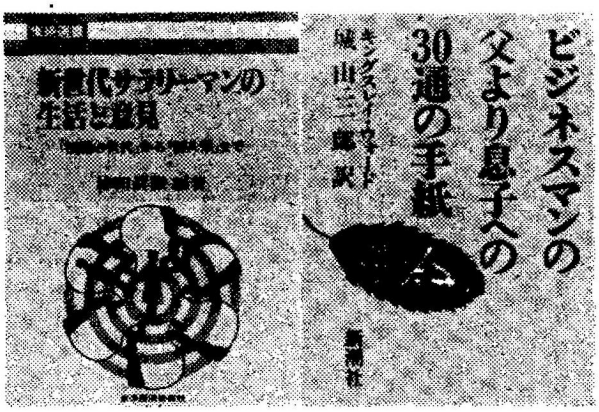
『ビジネスマンの父より息子への30通の手紙』の結び近くには、哲学者エピクテートスの次のような言葉が引用されている。

「宴席で作法を守るように、人生の作法を守ることを忘れてはならない。ご馳走がまわってきて、自分のまえに来たら、手を伸ばして、礼儀正しく一人分を取る。……まだまわってこないうちから欲しそうにしないで、自分のまえに来るまで待つように。子供についても、妻についても、地位についても、富についても同じことである」

この言葉に象徴されるように、三十通の手紙は人間の歴史を貫通する知恵の結晶をビジネスの世界に凝縮させて、次世代の息子に贈られている。物静かに語られていく行間には、温かい愛情とともに、厳しく指導する雰囲気もまたにじみ出ている。訳者が一種の教養小説としても読めたというのもうなずける。

六十代半ばというカナダ人の著者は、公認会計士として六年働いたのち、「綜勘定元帳の眼ではなく、マーケティングの眼」でビジネスをみるべく化学事業に進み、数個の企業を成功させて、いまは引退しているという。息子が名門私立大学に入学したときに送った第一通から、社長に任命して以後の「生活のバランスを保とう」（第二十九通）、「あとは君に任せる」（第三十通）まで、息子がビジネスの荒波のなかで遭遇した数々の難関に際して、ビジネスマンはいかにあるべきか、父親が与えた助言がこの本を構成している。

日本の同族企業に似た家族企業の帝王学がこの本の内容になっている。しかし教育の設計、部下との衝突、結婚を気軽に考えないで、読書の価値、人生の幸福とは……一般のビジネスマンにも通用する普遍性があることがこの本をベストセラーにしているのであろう。



たしかにビジネスマンの常識、というより良識を高める本だが、こういう本を読むときには同時に、技術者の修羅場での奮闘ぶりを描いた海老沢泰久の『F1地上の夢』を座右におくことをすすめたい。

父親から息子へ、旧世代から新世代への言葉に対して、**『新世代サラリーマンの生活と意見』**は「団塊の世代」から「モラトリアム世代」「新人類」までの新世代サラリーマンが自己の体験を語ることを通して、自分自身の主張を明らかにしたものである。いわば息子から、"おやじ"、"おじいちゃん"への手紙といえるだろう。

具体的には一橋大学社会学部の津田眞激教授の専門ゼミナール卒業生の生活体験と主張によって、この本は構成されている。労働経済学・労働社会学を専攻し、日本的経営を生活共同体論として展開してきた津田教授のゼミは昭和四十五年に開設された。したがってゼミ所属者の全員が団塊の世代以後になっている。約二年を費やして出来上がった内容は、やはり新世代を知るために格好のものとなっている。

昭和三十五年以降に生まれ、共通一次試験を受けて大学に入った新人類と呼ばれる人たちの座談会が面白い。価値観を価値感と書き、ぼくたちには思想がないという彼らのなかの一人は、うるさくて大嫌いな課長がイラクに転勤になったとき、イラン軍に志願したかったくらいだと語る。こういう調子で自分たちのビジネス生活がイメージ豊かにつづられている。

三つの新世代それぞれの座談会は、日本企業がドロドロした具体的な人間関係で動く様相を描き出している。奥さんたちの証言を入れてあるのも彼らの生活全体を照らし出すのに役立っている。二一世紀企業社会の担い手たちからの提言は、今後の企業経営を考える者に一読の価値がある。

出身で東北なまりの抜けない石丸さんは自称〝在郷青年〟。東京・下町の風景に「都市のなかのムラ」を見いだし、終戦後からほぼ十年刻みでスケッチめぐりをしてきた。

本書はこの膨大なペン画のスケッチから最近の下町の風景とひと昔前の風景を選んでのせてある。本郷、町屋、柴又、上野、浅草などで、画家の目にとまった下町の人情、哀歓、言葉、匂いなどが随筆風に書きつらねてある。

画文集「下町ものがたり」

石丸　弥平氏

が見えた時代であるだけに、郷愛としていて、寂しい」

衰退する日暮里駅前の駄菓子問屋をスケッチしながら、「坪六千万円の土地にビルを建て、億単位でそろばんする人と、千円単位のモノサシで暮らす人との落差がありすぎる」と考えこんでしまう。「共同体の再生は不可能」と思いながらも、人懐しさに下町を歩く石丸さんのペン画は懐かしくもの哀しい。

（用美社・一、七〇〇円）

50年の発展ぶり概観

二〇世紀技術文化史 上・下

T・ウィリアムズ著

現代のビジネスチャンスの多くはハイテク（高度先端技術）と密接に結びついている。しかし、パソコンやワープロを使いこなす経営者も、ハイテク製品のしくみを問われると、よくわからないという人は多い。本書は今世紀前半、約五十年間の技術発展の流れを概観しており、現在のハイテクのルーツをとらえなおす格好の手引きとなる。

訳者が「マーガリンからジェット機まで」と評したように、内容は網羅的だ。章立ては原子力、食品加工、都市計画、計算機など各技術分野が並列的に並んでいる。著者はある程度の重複を承知しながら、近代技術がいかに互いに深くかかわりあっているかを読者に示そうとしている。上巻では原子力の章が分量的に一番多く、「化石燃料」「天然動力」と章を読み進んできた読者にとっては、原子力がもつ新しさ、異質性がよく理解できる。

本書が扱っている半世紀のあいだに、産業を支える高度技術は教育、経営・労働、政府そして軍事との結びつきを強めた。著者は二つの世界大戦にはさまれたこの半世紀を西欧科学技術の一つの節目としてとらえており、本書に定まった視点を与えている。

本書のもとになったのは、オックスフォード大学出版部が三十年近くをかけ、文明のあけぼのから今世紀半ばに至る科学技術の発展をまとめた『技術の歴史』シリーズ。その最後の二巻を編集した科学ジャーナリストの著者が一般向けに書きおろしたのが本書。各巻末には分野ごとの詳しい参考文献が載っている。中岡哲郎、坂本賢三監訳。

（筑摩書房・各三、二〇〇円）

三世代相違くっきり

新世代サラリーマンの生活と意識

津田　真澂編著

サラリーマンをテーマにした小説や映画、そして統計、分析の類は多い。それは現代がまぎれもなく高度産業社会であり、サラリーマンが量的にも質的にも、現代の中で重要な地位を占めているからにほかならない。

ただひと口にサラリーマンといっても、所属する組織や世代などによって、行動や考え方は千差万別である。それゆえ、平均的サラリーマン論は、生身の人間が後ろに隠れてしまい、面白くない。といって、個人の意見を羅列するだけでは、一般性に欠ける。

本書は「団塊の世代」から「新人類」までの新世代サラリーマンの生活意見を採り上げている。サラリーマン個人の声を座談会形式で拾うとともに、データによって、この世代の一般的な考え方などを補強している。

この手法によって「団塊の世代」「モラトリアム世代」「新人類世代」の三つの世代の相違が、くっきり浮かび上がっているため、サラリーマン論を超えた世代論にもなっている。また座談会に登場したサラリーマンの婦人による夫像や、外国人による日本のサラリーマン像が盛り込まれるなど、多角的なサラリーマン論になっている。

最終章での「新人事制度の樹立」や「楽しい職場づくり」などの提言も的確。ナマの声の提供者が一橋大学の津田ゼミ卒業生に限られているので、対象が偏っている印象があるが、サラリーマンの本音を引き出すためには、それもやむを得ないことなのだろう。（東洋経済新報社・一、四〇〇円）

務の矢面に立った通産処してきたかを鮮明産省といえば米国か・MITI」（悪名レッテルを張られる権化視されてきたが、「国益を守ったまで」と〝佐橋（滋）大臣、三官〟に象徴されるよをはじめ一徹、インど多彩で、多くの秘話せてくれる。

（文芸春秋

如水会報

ゼミナールだより

しんめい会（津田眞激ゼミ）

津田先生還暦記念パーティー

日　時　62年2月15日　12時～

場　所　スターホール

出席者　津田先生ご夫妻・来賓2名・OB77名・OBの夫人26名・学生9名　（合計一一六名）

還暦そのものは昨年の二月でしたが、還暦記念事業の一環として一昨年の4月以来ゼミテンの座談・手記・ゼミテン本人及び夫人へのアンケートを中心に編集作業を行なってきた『新世代サラリーマンの生活と意見』（東経選書　定価千四百円）の完成にあわせて還暦記念パーティーを開催した。出版にあたりご尽力いただいた東洋経済出版局の藤井次長にもご出席いただき、また同社のご配慮で当日の日経朝刊にはこの本の広告が掲載されており、さらに当日から全国の書店に一斉に並べていただけるなどこの日はゼミテンにとって記念すべき日となった。

先生の奥様より是非OBも夫人同伴でとの話があり、大変華やいだ雰囲気となった。先生の生立ちから現在までのスライドの上映等のアトラクションもあり、終始笑いの絶えない楽しいパーティーとなった。来賓として出席された長沢哲夫氏（経済企画庁審議官）には編集段階から多大なご指導を戴き、今回出版できたのもひとえに同氏のお力によるところ大だったこともあり、これを機会に当会の特別顧問に就任いただき、今後ともご指導願うこととした。

先生ご夫妻への記念品としてはビデオムービー一式をお贈りし、早速パーティーの一部始終を収録することもできた。パーティーのしめくくりとして、先生ご夫妻への花束贈呈・エールを行い、還暦を過ぎても若々しい先生の今後のご健康とご活躍を祈って散会した。

『新世代サラリーマンの生活と意見』については、3月15日の日経・4月12日のサンデー毎日等でも紹介されていますが、如水会員の皆様にも是非一読いただければ幸いです。

（揖斐　記）